

# たぐみ

## Craftsmanship

特集 瀧田史字作陶展

第8号

「汝の隣人を愛せよ」

ということ

テレビで、家のリフォームを手助けするという番組を観た。不況のせいか近ごろ流行りだが、今回は、次男が交通事故で全身麻痺となり、それから間もなく父親が血液性癌で入院したという家族の話であった。自然の縁と海風の中で療養させたいという、母親の切なる願いをとりあげ、海辺の古い家を身心にやさしい家に改造するという話である。

家のことはともかくとして、家族愛の話はいつ聞いても、どんな話でも嬉しく、そして心を打つのである。それは近親への愛が、人間の本性に基いたものであるばかりでなく、それはいつも無償の愛だからであると思う。

「愛」という言葉が出ると、日本の男性はとかく面映ゆい気持ちになる。なかなか素直に愛情表現ができないのだ

が、異性間のことではなく人類愛といった場合にどうなのであろうか。

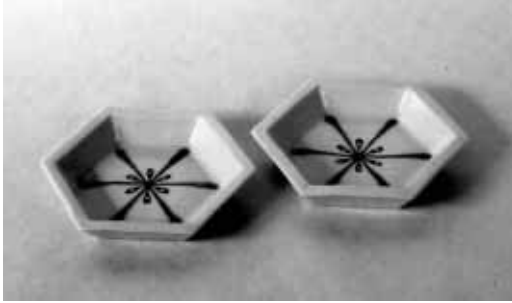
私は他者への無償の愛、ということを考えてときに、大正八年から九年にかけて柳宗悦が書いた論稿「朝鮮人を想う」「朝鮮の友に贈る書」「彼の朝鮮行」、この三つを忘れることはできない。

そこには、大正八年三月の朝鮮の独立運動への日本官憲の仮借のない弾圧に際し、心を痛めた柳の切々たる心情が吐露されている。

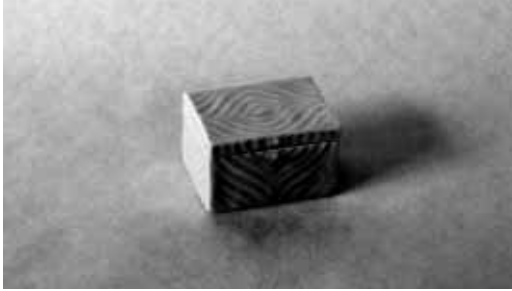
個人や民族を問わず、他者の尊厳や固有の歴史と文化、価値観を尊重し、認め合うことなしに、人と人の、国と国との相互理解と平和はあり得ないのである。そのことを柳は、他者への愛、という言葉で書いている。

キリストの言った「汝の隣人を自分と同じように愛しなさい」という言葉の意味も、異教徒をも愛せよ、ということだという。この言葉を、いま世界の指導者たちはどう聞くのであろうか。

(志賀直邦)



赤絵六角皿



白磁鑄手香合



赤絵五寸皿



白磁鑄手香合



白磁把手瓶子

たくみ企画展  
瀧田史宇作陶展

会期 平成十五年十二月六日（土）～十一日（木）  
会場 銀座たくみ二階サロン

## 史宇さんに期待する

瀧田史宇さんが、昭和六十一年に再度のスペイン留学から帰って、現地で焼成したものを中心に、その年の十二月にたくみで個展を開いてからもう六年が経つ。

史宇さんの作品はもちろん磁器で、



瑠璃釉金彩皿

白磁、染付、色絵と多彩だが、いずれも端正で見事である。コーヒー碗皿にしてもカップの形状と把手や受皿とのバランスも良く、使つて飽きがこないのが嬉しい。ケーキ皿、パン皿、取鉢や型小皿、手付のマグに盃、急須に湯呑と挙げてみて、そのすべてが、ほとんど毎日の食卓でなじみであることにも驚くのである。

あえて意識的に選ばなくても、料理と取り合せが良くて、丈夫で使い易い器が自然に食卓や台所を占領する。史宇さんの造る器は、まさにそういう器なのである。

それにもうひとつ、史宇さんの器は他の窯の、とりわけ土物の、陶器の器と相性が良いのである。それはまさに史宇さんの人柄ともいえるのだろう。

史宇さんは、ご家族にも、仲間や仕事のお付き合いの上でも気配ばりが行き届いていてやさしい。やさし過ぎるとすら思うことがある。

作品も生真面目で、新しい試みもいつも破綻なくこなしてしまふ。恐ろしくは常に全力投球なのである。あるいはご本人は気がついていないのかも知れないが、このごろ彼の作品にある種の完成度が見られるような気がする。

何も完成度が悪い訳ではないのだが、到達点に達するにはまだ若く、早いような気がするのである。史宇さんの父上項一先生にはまだまだ若氣というか遊び心というか、何かそういった邪氣という雰囲気があつて、それが作品の大きな魅力となつていふと思う。

史宇さんも、そういった父君に遠慮することなく、大いに邪氣をもつて創作に励んでいただきたい。でき得ればもう一度、史宇さんの作陶の原型を形づくる一助ともなつたであろうスペインを訪ねて、思い切り栄養をとり込んで、また新しい史宇陶の楽しさ、魅力を私たちに見せてほしいと思う。

(志賀直邦)

## その頃の「たくみ」界限(其の一)

瀧田 項一

上野の美校を受験準備の為に中学を仮卒業したボクは知人を頼って上京、新橋は第一ホテルの隣りともいえるピルの建築設計事務所に、お茶汲み電話番その他雑用使いの給仕として厄介になった。昭和十八年の歳の暮である。たくみとは目と鼻の先とも云える距離で、その界限は朝な夕なに通りがかったものである。



昭和20年代のたくみ

今の電車通りは、その頃閑散として遙かに遠くまで見とおせて、市電がゴトゴトと走っていた。ボクは牛込若松町の下宿から市電で神楽坂、飯田橋、神保町とすぎて呉服橋あたりで乗り換えて電車通りを電車の窓から物珍らしく眺め乍ら来ると、やがてひとときわ不思議な土蔵造り風の「たくみ工藝店」の前を毎日異様な思いでみつめていた。

ボクの乗った電車は、その「たくみ」を過ぎて土橋の交差点を右に折れた鉄道のガード下が終点であった。

いまは高速道路が上をはしつっているが、その頃は運河が濁った水を漂よわせ、糞尿汲取りの桶を積んだダルマ舟が船先を連ねて浮かび、悪臭が漂よい鳶が岸辺の獲物を狙つ

て低く飛び交っていた。こん日想像だに出来ぬ情景である。

昼になると急いで弁当を片づけて、その界限を散策してまわった。まだ美術商も客の無い店を開いていた。日毎に戦火も拡大しつつある頃である。

たくみの硝子戸を押し開けると番頭さんが、げげんな目つきでボクを見た。上野訓治さんだったかも知れない。壁の高い柵には蓋の付いた大小の壺が光っていた。

ボクには初めて見る世界であった。田舎者の若僧は一言も喋らず店の空気を存分に吸い込んで外に出た。

やがて戦は益々悪化不穩の世相となり、かの日劇のホールまで軍需工場と化した時代となった。銀座は暗く無彩色な街となり、運河沿いの全線座の映画もニュース映画館となり、ボクの建築事務所も工場の鉄骨組みの計算ばかりで全く面白くない。新橋駅の高架橋を行く電気機関車の甲高い汽笛が一層もの悲しくさえ思えたものであった。

上野の美校にもぐり込み、そうした新橋とも遠のいている内に空爆を受けて東京は焼土と化して敗戦。

益子での修業を了えて会津の地に独立作陶、苦心惨憺して焼いた幾許かの茶碗や皿を林檎箱に荷造って、厚かましくも「たくみ」に送り込んだりした、押し売りである。いまになって思うと冷汗三斗鉄面皮もいところである。

伊東安兵衛さんが支配人だったか、ともあれ丁度居合せた師濱田のタイシヨウと箱からつまみ出た物の酷評を受

## 芹沢銈介の物語絵について (一)

### 物語絵の由来

「絵本どんきほうて」「極楽から来た」といえば、芹沢銈介作品の中でもっとも親しまれた作のひとつだが、現代物語絵としても白眉といつてよい。

物語や史書に挿絵をほどこすのは昔

けて全て却下、哀れに思つた安兵衛さんが京橋の「ミモザ」なる工藝店茶房を紹介下さり、自転車荷台に括りつけて銀座の大通りを京橋まで走った。

銀座通りには行き交う車も少なく進駐軍のジープのみ、静かな大通りにペダルを踏んだ。灰色の如き惨めな思いも今では遠い霧の彼方に消え去ろうとしている。

ボクと「たくみ」との接点である。

(日本民芸協会理事)

からあつて、その一番古いといわれるのは、前二千年代のエジプトで、パピルスに書かれた「死者の書」の挿絵である。その書巻挿絵の形式が古代ギリシャ、ローマにも伝わり、現存するものでは紀元七〇〇年頃のアイランドの「ケルズの書」が知られている。

東洋では、イランとインドで細密画(ミニアチュール)といわれる小型の物語絵が盛んになるが、イランやインドのムガール王朝のイスラム文化圏と、インドのヒンドゥー文化圏との大きなちがいは宗教性の有無にある。

イスラム教では偶像崇拜を禁じたことから、細密画のモチーフは歴史物語や官廷の生活、動植物などが多く描かれた。これに対しインド北西部のラージプト地方では、ヒンドゥーの叙事詩ラーマヤーナの物語、つまりヴィシュヌ又神の権化としてのクリシュナと、彼を慕うラーダーの物語として描かれる。これがラージプト画の特徴である。

アジアの佛教圏では、佛教説話が經典や曼陀羅とともに拡まりわが国へも伝えられた。しかし絵物語はわが国では独自の発達をとげる。そしてそれは千年の年を経て今なお親しまれている。源氏物語には、平安時代にはすでに多くの絵物語があつて、王朝貴族たち

の間ではその蒐集と絵合わせを競ったという話が記されている。

それらの絵物語とは、長恨歌、王昭君などの中国の物語や、竹取物語、宇津保物語、伊勢物語ほかさまざまな物語である。平安時代にはほかにも信貴山縁起、伴大納言絵巻、鳥獣戯画巻な

ど秀れた絵巻が作られたことはご承知のとおりである。

中世には浄土思想の興隆によって、布教用として地獄草紙、餓鬼草紙や、宗派の祖師の伝記として、法然上人や親鸞上人の絵伝、一遍上人の聖絵などが作られた。

さらに室町時代、そして江戸時代に入ると、絵物語はより広く武士や庶民の間に流行して、浦島太郎などの御伽草子、絵草子が数多く作られるようになった。ただし近世の絵草子は、手彩色のある丹縁本も含めてすべて木版本である。

### 和染絵がたり

ところで、昭和十一年十月、東京の駒場にかねてからの待望の「日本民藝館」が開館した。案外知られていない話だがこの開館時の特別展として開かれた「民藝同人作家新作品展」に、棟方志功の「大和し美し」「華巖譜」と並

んで、芹沢銈介の「和染絵がたり」と「絵本どんきほつて」が陳列されたのである。

それも一階大広間の左右の壁面すべてを使って飾られたのであった。このとき芹沢は四十一歳、棟方は若冠三十三歳。柳宗悦をはじめとする民藝運動のリーダーたちの、この二人の新しい仲間へ寄せた期待の大きさがわかる。

このときの芹沢の二作は、いずれも合羽刷り、手彩色の作品であった。合羽刷りとは型紙を用いて輪郭を描くもので、型紙による制約は肉筆や木版とはまたちがった美しさを生む。

「和染絵がたり」は出雲和紙を用いた表紙は朱漆の題字で、百冊の限定本として刊行された。柳宗悦はこれに寄せて次のように記している。「和染の染方を絵解きした本であるが、絵や字を型紙で刷り、これに丹縁を手差しした美しい本である。寛文(江戸前期末)以降この種の差色絵入本として、これ



和染絵語



程のものは決してないと思う」。

### 絵本どんきほうて

さて芹沢が次に発表した絵物語は、「どんきほうて」の物語である。この誕生にはこんなエピソードがある。

書誌学者として知られた寿岳文章によれば、世界的なトンキホーテ関連文献蒐集家として知られるボストンの実業家カール・ケラーの依頼によって、西洋絵画の真似ではない、日本独特の絵本の蒐集を心がけてきたという。しかしそのいずれもがカール・ケラーを満足させるに至らず、新作を考え、柳



絵本どんきほうて 表紙

宗悦、河井寛次郎とも相談の上芹沢銈介に白羽の矢を立てた、と寿岳は記している。

ラマンチャの卿士ドン・キホーテの行状記を絵本として構想するということは、芹沢にとつてはたいへんな難行で、のちに彼が寿岳に語ったところに



挿絵一 さんちよ從へ廻国への門出

よれば、「和染絵がたり」の制作は、「絵本どんきほうて」の構想に苦しんだ芹沢が、せめて生気をとり戻すためのいわば息ぬぎのためであったという。

「絵本どんきほうて」は昭和十二年はじめに全巻が完成し、袋綴和装本で限定七十五部が刊行された。そしてその内十五部が型紙すべてとともに、ボストンのカール・ケラーの元へ送られたのであった。

この「どんきほうて」は、戦後の芹沢ファンにとつては幻の一冊であったが、愛好家の再刊への願望絶ちがたく、昭和五十一年、初版と同じ三十一葉ながら、新しい型絵染による新版「絵本どんきほうて」が吾八から限定二百部で刊行された。その後東京民藝協会から十二葉版も刊行され、芹沢版「どんきほうて」の人気の高さを伝えている。

(志賀直邦)

なお、「法然上人絵伝」極楽から来た「十三妹」については次号に書く予定である。

## アジアの工芸品一〇二〇点を韓国国立中央博物館へ寄贈 — 金子量重氏の偉業 —

今年の盛夏の頃、七月二十一日から八月十七日にかけて、韓国国立中央博物館で、金子量重氏の蒐集による「アジアの民族造形展」が開催された。この種の展覧会は韓国では初めてのこととて、会期中終始賑わいたいへんな話題を呼んだという。

このとき陳列されたミャンマーの佛頭やタイ・バンチエンの彩文陶器をはじめとする数かずのアジアの工芸品は、いずれもアジア民族造形研究所長金子量重氏の寄贈によるものである。

韓国の国立中央博物館は現在手狭まなため、ソウルの竜山に新しい建物を建築中で二〇〇五年に完成するという。その暁には寄贈品のほとんどが中央博物館二階の寄贈館「金子量重室」に展示され、残りは「東洋室」に展示されることになっている。

この金子氏の偉業と「アジアの民族造形展」については、韓国の各新聞でも大きく取り上げられたが、国民日報では次のように紹介している。「金子寄贈特別展—アジア人の生、アジアの心」の説明会で金子氏は、過去の韓・日関係に言及し、博物館側に次のように感謝の気持を表した。金子氏は「私が蒐集したアジアの工芸品を国立中央博物館に寄贈した理由は、過去の韓国からの文化的報いに少しでも恩返しするためです」。

さらに金子氏は、親友の郭少普韓国著作権センター所長から、新築中の中央博物館の東洋室に展示する遺物が足りないという話を聞き、郭所長の勧誘もあって寄贈を決心したと語った。

金子氏は、アジアをはじめとする民族文化の研究では、その広範囲のフイ

ールドワークと、民族造形文化という独自の概念の提示で知られる。

従来の西欧的価値認識にとらわれない金子氏の独自の方法論の根底には、柳宗悦の民藝美論があると思うが、それはひとまずおく。

金子氏は人類の歴史とその発展過程を、西洋の近代史学によって観るといふ立場をとらない。もつとマクロ的に、すべての地域のあらゆる民族の、多様に異つた固有の歴史と民族文化を、まったく等価値のものとして位置づける。そしてそれぞれの民族文化を尊重し交流することをおして、未来の民族間の融和と共存の可能性を探ろうとする。したがって近代において発生した「近代国家」の概念は氏の念頭にない。

そして人びとにとつての真のアイデンティティとは、永い歴史の中で形成されてきた相互依存的な民族文化の固有性と普遍性の総体でなければならぬ、と説くのである。

(志賀直邦)



わがふるさと紹介 栃木・真岡

## お江戸の浴衣は「真岡」でいける

塚田 政之助

はるか西北に日光連山、東南に筑波山を望み、清流・鬼怒川に抱かれた栃木県の芳賀地方にふるさと真岡がある。

私が育った頃は、美しい雑木林が鬼怒川（西側約四キロ）まで広がっていたが、今は工業団地に変りその面影はない。

鬼怒川、小貝川流域は江戸時代、関東を代表する綿花地帯で、真岡が生綿花の晒加工の中心地であったことから、この一帯でつくられた木綿は「真岡木綿」と呼ばれるようになった。江戸に出荷され、浴衣は「真岡」という代名詞でよばれるほど愛用されたそうだ。天保十四年（一八四三）当時天領であった真岡に、幕府の命で二宮金次郎（尊徳、御普請役格）が農業の立て直

しのため赴任している。尊徳が改修した灌漑用水の堰は最近まで残っていた。

尊徳は疲弊した農村を徹底してまわり領地と農民の生活状況を把握したうえ、精農者に賞を与え、怠慢な者をいましめるなどして農村復興事業をすすめた。

幕末期、水戸に近い真岡は水戸藩の影響もあり尊皇攘夷論者が輩出している。坂下門外の変（老中安藤信正を襲撃）にかかわったり、筑波山に挙兵した天狗党に加わった者もいた。

子供の頃、風呂上りに濡れた手拭を「パチッ」とたたくと祖母はひどく嫌がった。それは真岡代官に捕らえられた天狗党員が町外れの処刑場で打ち首にあった音と似ているからだ。その場を目撃した父から直かに聴いた話

だと祖母はいつていた。

真岡の東隣の益子に、笠間焼を習得した大塚啓三郎が窯を開いたのもこの頃である。益子焼は、ながく生活用品だけに使われていた。それを民藝品として評価し、世界に広げたのが濱田庄司で、氏の作品をはじめ世界の民藝、工藝品を展示している「益子参考館」の大谷石の蔵は、真岡の篤志家が寄贈し移築したものである。

私は、十五年戦争発端の翌年（一九三二）に生まれ、侵略戦争の真つた中で育った。この小さな田舎町でB29の焼夷弾爆撃にあい、芳賀病院（日赤）が焼失した。

われわれの世代は戦争の怖さ悲惨さが身にしみている。先の大戦を経て、「戦争をしない国」になった日本を再び「戦争ができる国」に戻そうとする動きが強まっている。戦争を体験したわれわれが、平和の声をあげていかなければとの思いがつのる。（団体役員）

〈秩父からのたより〉

## 古民家移築再生事業のこと(二)

山下 治

前回(その一)では、棟上げを九月下旬から十月初旬と書きましたが、種々の理由で十一月四日となりました。

その間の事柄をいくつか報告します。

まず基礎はいわゆるベタ基礎です。まず基礎はプールを作るようなもので、降雨後はまったくプールとなり

ます。水抜きは一カ所へ集中しているため、竹ボウキなどで水を流します。屋根が出来るまでには、何度水掃きをするのか気の休まることはありません。

さて、囲炉裏の煤と永年のほこりで真黒になった材料研きも大変な作業です。最初の荒掃除も早くしないと大工



正面式台上部。5月29日着工

さんの細工に支障がありますので大忙がします。細工後の磨きは、建設現場へ運び、九月の残暑の頃から二カ月、雑布はすぐに破れてしまい、何枚使ったかわかりません。

研いて艶が出てても水

に濡ればすぐに跡が付き、仲々取れません、雨や夜露は大敵で、これに屋根が出来るまで続きます。

又、梁類は真直ぐなもの無く、移動しようとするれば重いばかりかあらゆる方向へゴロリとなったりで夫婦とも手や足は青アザだらけです。

幸いと言うべきか不幸と言うべきか、平屋を二階建てとしたため、細工に手間取り、予定を大巾に遅れ、研きの時間が取れました。しかし、毎日夕方はシートで覆い、朝ははずすという作業が続きます。木工事については、建物が雪国仕様のため、屋根の小屋根組みが「二の小屋」の上へ「二の小屋」が重なっており、この小屋組が立派な材料で、これの見える家になりました。

二の小屋部分を嵩上げて二階とします。これが大工さんにすっかり手間を取らせてしまいました。梁は山なりになっていながら左右に曲っていたり、ほとんど四角なもの無く、二階高を



上 大黒柱に梁の掛かった所  
下 西側玄関より土間部分

取りたいため、柱も束（つか）もすべて長さが違うという職人泣かせの仕事でした。

と言うような訳で上棟が遅れ、又一日ではとても上棟は出来ませんでした。当日は早朝より、大工、職方等々多数の方々が集まり、友人達の協力も

得て、お勝手も整い、大黒柱が建ち、太く大きな山なりの梁や差し鴨居がそれに乗った時は感激でした。

この原稿を書いている現在、屋根葺きまで行っていますので、まだまだ朝晩のシートはずしや水滴拭は続いています。古材は解体後、再生までの時

間が長いとかなり動きまますし、松の梁など未だに松脂が出ます。

組み立てに時間はかかりますが、少しずつ組み上って黒光りする材料を見えますと、昔の人達の智慧や技術以前に、このような大がかりな木組にどのような気持で取り組み、又、住んでいたのか、自分達が気持の上で、この家の持つ力に耐えられるのか等々思ってしまうこの頃です。

民家再生の気持を持った頃から、家庭画報や雑誌の記事を保存し、それが何年分か溜るとハードの表紙を付け、一冊に製本して楽しんでいました。実際に取りかかってみると、毎日が大変でかなりの気力が必要です。本を見ているような訳にはゆきません。現場に教わる仕事が多いため、現場へは出来るだけ行きたいと思いますが、身体は疲れて来るため、出来る時はどうなってしまうのか、気力と体力の勝負となりました。

（秩父民具の会）



島根県出雲張子の申



山口県秋吉の土鈴の申

## たくみ歳時記 干支の玩具 申

こんにち郷土玩具といわれているのは江戸時代の前期ごろから、盛んに作られるようになったようです。やはり城下町や街道筋で作られ、売られたものでしょう。

しかし干支に因んだ玩具が作られる

ようになったのはいつからか、ということですが定かではありません。日本には七福神信仰は盛んでしたが、正月などの節時に十二支をいうことはありませんでした。干支をいうようになったのは高島易断などの影響でしょうか。

最近では中国人がすぐく喜ぶということで、中国と取引のある商社の人がまとめて買っていくとのこと、これもまた時代の移り変わりといえましょう。

## あとがき

今号に玉稿を頂戴した瀧田項一先生は史宇さんの父上。富本憲吉、濱田庄司の両巨匠に教えを受けた現代陶藝界の重鎮である。

塚田政之助氏は小生の大学時代の同級生だが、真岡高校では濱田先生の三男篤哉氏、益子のつかもとの塚本雅也前社長と机を並べた由、残念ながら雅也、篤哉両氏とも故人となられた。

山下さんには前号につづいて古民家再生の原稿をいただいた。棟上がおくれ、原稿も写真もあわただしい中で用意されたとのこと。お礼の言葉もない。

たくみを愛して下さる方たちから玉稿をいただく度に、本誌の内容が豊かになり皆様に喜んでいただける。嬉しいことである。

(S)

発行 株式会社たくみ

東京都中央区銀座八丁目二  
発行責任者 志賀直邦

電話 〇三―三五七―二〇一七

FAX 〇三―三五七―二一六九

振替 〇〇―一〇―二―三五六五九

定価 六〇円(税込)